様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３９６

研究課題名（和文）冷戦期創作科教授哲学と20世紀アメリカ文学の研究：自由陣営文学における自己検閲

研究課題名（英文）Studies on Cold-War Creative Writing Pedagogy and 20th Century American Literature

研究代表者
吉田　恭子（Yoshida, Kyoko）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：９０３３８２４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は大きく４つに大別できる。（１）冷戦期のアメリカ文学生産・解釈にかかわる研究、（２）ポスト国民的世界文学の現状にかかわる研究、（３）翻訳や言語横断的な表象が戦後～現代文学に果たす役割にかかわる研究、（４）文学レジデンシーや国際文学祭、詩人の交換プログラムなど、実際に創作の現場に参与する研究。以上それぞれの領域において一定以上の研究成果を上げることができた。とりわけ、ディストピア小説の扱いについては、冷戦期のアメリカ文学生産と需要における自己規制・自己検閲を理解する上で鍵となる可能性が理解された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は戦後から今日に及ぶアメリカ文学生産の状況を、「自己検閲」「クリエイティヴ・ライティング・プログラム」「ポスト国民文学」「世界文学」「翻訳」といった、新たな視点から見直すことを行った。排他的に特定の国家や言語に帰属して文学が生産された戦後から、地理的帰属や言語使用が流動的になってきた今日の文学生産の変化を把握するための洞察を提供している。

研究成果の概要（英文）：This research project involved the following four different approaches to the subject: (1) researches related to the production and interpretation of American Literature in the Cold War period; (2) researches regarding the present conditions of post-national / world literature; (3) researches about the roles of translation and trans-lingual modes of literature from the post-war period to today; (4) observations as a participant in various international literary residencies, literary festivals and literary exchanges. In each field, satisfactory accomplishments were made. Particularly, the researcher has gained a significant insight about the relationship between Dystopian Literature and the state of cold-war literary production in the United States.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　現代文学　クリエイティヴ・ライティング　翻訳　世界文学　冷戦

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は、日本の大学院でアメリカ現代文学を学んだ後、アメリカでクリエイティヴ・ライティング（以下創作）を専攻し、博士号を取得した。以降、英語での小説執筆を続けながら、現代アメリカ文学の研究・教育を続け、2005 年には創作科の発祥地であるアイオワ大学の国際創作プログラムに参加、2006～07 年にはブラウン大学文芸プログラムに訪問フェローとして滞在し、世界各地の文学祭にも積極的に参加を続け、現代アメリカ文学・世界の英語文学において創作科の果たす役割についてアイオワ大学のアーカイヴを中心に情報を収集し実証的な考察と発信を続けてきた。また、2005 年以降は、創作科のグローバル化現象にいち早く着目し、アメリカだけでなくアジアの創作学会で研究発表を続け、とりわけ東南アジアの英語作家らと意見交換を繰り返してきた。2017 年度には、創作科研究の方向性を決定づけた研究書 *The Program Era*（2009）の著者 Mark McGurl 教授を招聘し、ワークショップおよび講演会による意見交換を行った。

近年、20 世紀中盤のアメリカ文学・文化に東西冷戦が与えた影響を検証する研究成果が内外で発表されている。この時期は創作科の教授理念が確立し、学生が執筆した習作を精読批評するワークショップ方式のカリキュラムが全国に広まり始めた時期と重なり、ワークショップの理論的基礎となった新批評は冷戦下の文学研究・教育において西側イデオロギーと親和性が高かったことも指摘されている。

その一方で、以上のような状況がアメリカの創作科の影響下で執筆された文学作品にどのような特徴を見せるのか、充分な研究がなされていない。創作科と冷戦のつながりについては、前述 *Workshops of Empire* (Eric Bennett, 2015)が現時点における主な著作としてあるが、あくまでも、スタンフォード大学の創作科を立ち上げた Wallace Stegner とアイオワの Paul Engle の役回りを伝記・歴史的に検証した研究である。

２．研究の目的

本研究は、アメリカの Creative Writing Program（以下「創作科」）が全米に展開する過程において、冷戦期の文化政策が与えた影響を多角的に検討し、その結果どのような「アメリカ文学らしさ」の言説が形成されていったか小説作品を実証的に検証することを目的とした。

創作科は 1930 年ごろに開設されて以来、作家のみならず、研究者、編集者、さらに多くの創作科教員を産出し続け、一世紀ほどで巨大な文化･教育システムへと成長した。その発展には 20 世紀半ばの冷戦状況が影響を与えたことが、近年明らかになってきた。第二次世界大戦後の主要な純文学作家のほとんどが何らかの形で創作科とかかわりをもったことがあること、そして創作科が本来米国に独自の芸術教育システムであることを慮れば、冷戦下の文化状況に創作科教授理念と文学評価基準とがどのような影響を受けたのか検証することは、アメリカ文学研究に貢献するところがあると期待される。

本研究は創作科を取り巻く政治・歴史・社会的状況が小説美学ひいては創作科経由のアメリカ小説生産に与えた影響を実証的に検証し、アメリカ小説の独自性すなわち「アメリカらしさ」が、アメリカの歴史や社会・文化背景だけでなく、冷戦下において「アメリカにふさわしい」小説を生産する、あるいは評価しようといういわばメタ的意図によって形成され取捨選択されたのではないのか、という仮説の下、現代アメリカ小説研究の射程を広げ、新しい視点を探ることを目的とした。

３．研究の方法

以上のような背景と問題意識から、今回の研究計画では（1）アーカイヴ資料調査（2）実証的作品研究（3）国内の連携研究者および海外の創作科関係者との協力（4）学会発表や論文による研究成果の発表、以上 4 段階を想定していたが、とりわけ（1）（3）（4）については新型コロナウイルスの影響により研究の進捗が妨げられた。以下、当初の計画と、研究期間中の実際の展開についてまとめる。

（1）アーカイヴ資料調査
創作科論争・創作科教授法に関する文献は、すでにある程度収集済みであるが、さらに歴史的

背景の実証検証に関しては、さらに積極的に関連アーカイヴを閲覧し資料入手する必要があるため、アイオワ大学、テキサス大学ハリー・ランサムセンター、スタンフォード大学、アメリカ国会図書館での資料収集を計画していた。2019 年より 1 年間英国でオックスフォード大学を中心に在外研究の機会を得て、Paul Engle 関連のアーカイヴをマートン・カレッジおよびローズ・ハウスで確認・閲覧・撮影する機会を得たが、それ以外のアーカイヴ調査については、新型コロナウィルス蔓延によるロックダウン、国際的移動の制限などによって、進展しなかった。

（2）実証的作品研究
本研究代表者が今まで研究してきた現代小説家（Kurt Vonnegut, John Barth, Bharati Mukherjee, J. M. Coetzee, David Foster Wallace） はすべてアメリカの創作科となんらかの関わりを持っていた。このことからもわかるように、現代作家を研究する上で、創作科とのつながりは見逃せない。今回の研究計画では、戦間期と戦後直後の作家に射程を広げ、冷戦期の文学評価との関連の検討を予定していた。ただ（1）が計画ほど進展せず、その結果、（2）もまた研究途中で研究期間の終わりを迎えることになった。のちにセクション 4 で述べる通り、（1）の歴史的背景を下敷きに、戦後アメリカ文学における創作科の位置づけと役割を、批判言説の分析と具体的作家研究と結びつける糸口は見つかったとは言える。

（3）国内の連携研究者および海外の創作科関係者との協力
研究期間中に、吉原ゆかり氏を代表とする国際共同研究加速基金（B）「冷戦期東アジアにおける創作教育、文化、大衆文化」科研研究グループに分担者として加わることになり、冷戦期文化外交の視点からの連携が可能になった。海外の研究者や創作科関係者との連携の場としては、米国の創作学会 AWP (Association of Writers and Writing Programs)を想定していたが、2020 年以降は参加できず、海外での連携はあまり進展しなかった。

４．研究成果

（1）Paul Engle について
2018 年 6 月のアメリカ学会全国大会の部会 D にて『文化冷戦の諸相―ロックフェラー財団・翻訳・Creative Writing』と題したパネルで冷戦文化研究の文脈からみた Paul Engle について発表を行った。このパネルでは、連携研究者のひとりで上記の加速基金の共同研究者でもある越智博美氏と連携・共同発表を行うことができた。

2019 年から 2020 年にかけてのオックスフォードでの Paul Engle のアーカイヴの調査で、彼が英国に留学中、同世代の詩人である Cecil Day Lewis との交流があり、ふたりで BBC ラジオに出演したり、Robert Frost のイギリスでの紹介に Engle が協力していることなどが判明した。Engle と Day Lewis は年齢も近ければ、30 年代はプログレッシヴな社会意識から創作を行い、徐々に保守化した軌跡も似ており、ふたりの交流やキャリアと作品の変化を比較対照することは、戦間期から冷戦初期にかけて、文学的クライメートの変化の理解を助けるのではないかと期待できる。オックスフォード大学には Day Lewis の遺族から様々なドキュメントが寄贈されている模様だが、2020 年の時点で未整理で非公開の状態であった。また、3 のセクションで述べた通り新型コロナウィルスのためにマートン大学でのアーカイヴ調査も途中で止まっている。とはいえ、以上の洞察が得られたことは、今後の研究方向性を決める成果であり、今後は、Engle の資料を整理・分析しつつ、Day Lewis の側からも調査が進められるよう準備を整えたい。

米国の創作学会 AWP では、2018 年タンパ開催の大会と、2019 年ポートランド開催の大会に参加・発表ができた。2019 年は小野正嗣氏、辛島デイヴィッド氏と「村上春樹はアメリカの作家か」というパネルを組んで発表した。AWP は伝統的に極めて国内的で作家研究もほぼアメリカ作家に限定されていたが、このようなパネルがアクセプトされた意義は大きく、アメリカ創作科に変化があることがわかる。また、この年の AWP では、海外から参加した作家のための特別会合や、アフリカの若手女性作家に限定した特別ワークショップなどが組織され、冷戦期と同様に、しかし違ったアプローチで、クリエイティヴ・ライティングをアリーナに文化外交が新たに展開していることを実際に参与的に観察できた。2020 年、2021 年の AWP は参加ができなかった。

上記のような現代世界文学、アメリカ文学についての参与観察的な報告は共著『現代アメリカ文学ポップコーン大盛』にまとめて発表することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 吉田恭子	４．巻 2021-3
２．論文標題 「ネイバーフッドの螺旋歳時記: 『ニューヨークで考え中』のノスタルジー」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ユリイカ2021	６．最初と最後の頁 217-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田恭子	４．巻 31.2
２．論文標題 橋の上の語り―『ブック・オブ・ソルト』の人物造形と言葉遣い―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 147-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 吉田恭子
２．発表標題 ポスト国民文学時代の現代詩
３．学会等名 世界文学・語圏横断ネットワーク　シンポジウム「世界文学再考――『生まれつき翻訳』のアクチュアリティ」
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田恭子
２．発表標題 翻訳するアメリカ文学
３．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部12月例会シンポジウム「 国民文学の終焉――アメリカ文学の（再）世界化、世界の脱アメリカ化から考える」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kyoko Yoshida
２．発表標題 Experimental Re:Retranslation
３．学会等名 American Literary Translators Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyoko Yoshida
２．発表標題 Writing and Translating in the Age of Post-National Literature
３．学会等名 Rutgers University Translation Workshop（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田恭子
２．発表標題 2017年ジャイプル文学祭に参加して
３．学会等名 第1回現代インド英語文学研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyoko Yoshida
２．発表標題 Special Session of the Discussion Group: Kyoko Yoshida discusses the translation and re-translation of Yoshimasu Gozo’s Alice Iris Red Horse (New Directions, 2016)
３．学会等名 Oxford Comparative Criticism and Translation
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyoko Yoshida
２．発表標題 Creative Writing in the Era of Post-National Literatures
３．学会等名 国際シンポジウム「近代文学の終り」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田恭子
２．発表標題 「アナクロニスティック・モダニズムとしてのノワール小説」
３．学会等名 日本英文学会2018年全国大会　シンポジウム「モダニズムの現代性――空間、情動、メディア・テクノロジー」
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田恭子
２．発表標題 「冷戦とクリエイティヴ・ライティング」
３．学会等名 アメリカ学会2018年度全国大会　「部会Ｄ　文化冷戦の諸相――ロックフェラー財団・翻訳・Creative Writing」
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田恭子
２．発表標題 「海を渡る料理人、厨房を旅する革命家: The Book of Saltのインドシナ人」
３．学会等名 第9回世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会　シンポジウム「パリの外国人（続）」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kyoko Yoshida, Natasha Pulley, Han Yujoo
２．発表標題 "Feminist Perspective on Speculative Fiction"
３．学会等名 International Writers' Workshop Literary Festival: The Many Worlds of Science Fiction（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyoko Yoshida, David Karashima, Masatsugu Ono
２．発表標題 "Is Murakami an American Writer?"
３．学会等名 The Association of Writers and Writing Programs (AWP) Annual Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 レベッカ・L・ウォルコウィッツ、佐藤 元状、吉田 恭子、田尻 芳樹、秦 邦生	４．発行年 2022年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 456
３．書名 生まれつき翻訳	

１．著者名 秦邦生編著（吉田恭子）	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 314
３．書名 ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む	

1．著者名 Sawako Nakayasu	4．発行年 2020年
2．出版社 Wave Books	5．総ページ数 135
3．書名 Some Girls Walk into the Country They Are from	

1．著者名 青木耕平、加藤有佳織、佐々木楓、里内克巳、日野原慶、藤井光、矢倉喬士、吉田恭子	4．発行年 2020年
2．出版社 書肆侃侃房	5．総ページ数 376
3．書名 現代アメリカ文学ポップコーン大盛	

1．著者名 高野泰志、竹井智子、中西佳世子、柳楽有里、森本光、玉井潤野、吉田恭子、島貫佳代子、杉森雅美、水野尚之、四方朱子、山内玲	4．発行年 2021年
2．出版社 松籟社	5．総ページ数 344
3．書名 テクストと戯れる ーーアメリカ文学をどう読むか	

1．著者名 吉田恭子，竹井智子，高野泰志，中西佳代子，島貫香代子，舌津智之，杉森雅美，森慎一郎，伊藤聡子	4．発行年 2019年
2．出版社 松籟社	5．総ページ数 339
3．書名 精読という迷宮―アメリカ文学のメタリーディング	

１．著者名 立命館大学英米文学会	４．発行年 2020年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 218
３．書名 英語文学の諸相―立命館大学英米文学会論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

The Narrow Road to the Deep Midwest
https://kyokoyoshida.net/news
OCCT MT Week 6 Updates
https://www.torch.ox.ac.uk/article/occt-mt-week-6-updates
International Writes' Workshop
https://hkcpdhub.hku.hk/wp-content/uploads/2019/02/2019-wr-bio-_-0207.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 アイオワ国際創作プログラムと日本文学	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ラトガース大学	アイオワ大学	スタンフォード大学	
英国	オックスフォード大学	英国文学センター		
中国	香港バプテスト大学			